

SOS! SOS!  
 巨大な危機を衝いて  
 高度1万2千メートルを  
 602便は飛ぶ!

# メイデイ 40,000 フィート

<カラー作品>

ワーナー・ブラザース映画

From Warner Bros. A Warner Communications Company



A crippled  
 plane.  
 A crazed  
 convict...

MAYDAY:  
 MAYDAY:  
 MAYDAY:  
 40,000ft.!

"MAYDAY: 40,000 FT.!" Starring DAVID JANSSEN • DON MEREDITH and CHRISTOPHER GEORGE  
 Also starring RAY MILLAND • LYNDA DAY GEORGE and MARJOE GÖRTNER • Guest starring BRODERICK CRAWFORD and JANE POWELL  
 Produced by ANDREW J. FENADY • Directed by ROBERT BUTLER • Written by AUSTIN FERGUSON, DICK NELSON, ANDREW J. FENADY  
 From a novel by AUSTIN FERGUSON • A. A. J. FENADY ASSOCIATES Production • From Warner Bros. A Warner Communications Company

## ■キャスト■

デビット・ジャンセン……………ピート・ダグラス機長  
 ドン・メレディス……………マイク・フラー  
 クリストファー・ジョージ……………スタン・バークハート  
 レイ・ミランド……………マンハイム医師  
 リンダ・デイ・ジョージ……………キャシー・アルメロ  
 マージョー・ゴートナー……………グレコ  
 プロドリック・クロフォード……………連邦警察官リース  
 ジェーン・パウエル……………キティ・ダグラス

## ■スタッフ■

製作=アンドリュウ・J・フェナディ/監督=ロバート・バトラー/脚色=オースチン・ファーガソン&ディック・ネルソン&アンドリュウ・J・フェナディ/原作=オースチン・ファーガソン/撮影監督=ウィリアム・B・ジャーゲンソン A.S.C./音楽=リチャード・マルコビッツ/編集=ニック・アーチャー/美術監督=ロバート・キノシタ/装置=エイアラ・ベイツ/メーキャップ=アラン・ファマ/調髪=ジェイ・クラーク/ユニット・プロダクション・マネージャー=マイク・フランコビック Jr/助監督=ブラッド・アロンソン/スタント調整=ビル・キャッチング/衣裳=スチーブ・ロッジ/音響=アンディ・ギルモア&テックス・ルドロフ/音楽編集=ドン・ハリス/音響編集=マイク・コルガン

## \*解説

追いつめられた兇悪犯が、民間ジェット旅客機の乗客と乗員を地獄の奈落に突き落とす! ワーナー映画「メイデイ 40000フィート!」はその恐るべき大事件を描く空のパニック超大作である。

乗客全員の生命を託された機長にデビッド・ジャンセン。『逃亡者』『秘密捜査官オハラ』などのTVシリーズでおなじみだが、最近は「いくたびか美しく燃え」「爆発ジェット・ヘリ500」「スイス・コネクション」など劇場用映画への出演が相ついでいる。

彼を囲んでTV界の人気スター、ドン・メレディス、『ラット・パトロール』『大列車強盗』のクリストファー・ジョージ、「ある愛の詩」「ゴールド」のレイ・ミランド、「すべて王様の家来」「紐育秘密結社」のプロドリック・クロフォード等の名優が演技を競っている。そして乗客を恐怖のどん底につき落とす兇悪犯に扮するのが「大地震」「巨大生物の島」などで最近メキメキ売り出し中のマージョー・ゴートナー。他にリンダ・デイ・ジョージ、ジェーン・パウエルが出演している。

監督は主にTV界で活躍しているロバート・バトラー。製作は「チザム」の製作・脚本を担当したアンドリュウ・フェナディ。彼はオースチン・ファーガソン、ディック・ネルソンと共に脚本も担当している。撮影はウィリアム・B・ジャーゲンソン、音楽はリチャード・マルコビッツが担当している。



## \*ストーリー

トランスコン602便がロサルゼルス国際空港に着陸するため接近態勢に入った。まもなく地上に降りるといので、コックピットのなかでは、副操縦士のスタン・バークハートと飛行技士のマイク・フラーがほっと一息つき冗談を言い合っていた。そこへスチュワーデス主任のテリー・ダンロップがやってきて雑談に加わった。

操縦桿をにぎっているのは機長のピート・ダグラス。彼はなにか心配ごとにとひとりで頭を悩ましているようだった。自分の考えに沈んでいるピートにとっては同僚たちの陽気な雑談も耳ざわりなだけだった。ついにたまりかねたピートは機長命令としてきびしい調子で着陸のための最終チェックを命じた。ピートが異常に緊張しているのに気づいて、テリーはすぐにその場を去り、スタンとマイクは黙々と自分たちの任務に戻った。ピートはふたたび思いに沈むのだった。

一方、ロサルゼルスでは、連邦警察官のサム・リースが新しい任務を受けていた。兇悪な殺人犯グレコを、ソルトレーク・シティからシカゴまで護送する仕事だった。グレコはきわめて危険な男だった。だが、年は取っていてもリースは腕ききのベテランで同僚たちからも尊敬されていた。彼は20年以上も勤続しているが、やはり寄る年波には勝てないようだった。それに胸を病んでいるらしかったが、断固としてそれを認めようとはしなかった。

飛行機が着陸すると、ピートはただちに航空事務室に駆け込んだ。彼が渡されたのは、至急連絡してほしいという妻からのメッセージ。さっそく

電話に飛びつくと、彼女は病院に入院中で、原因不明の腫瘍のために精密検査を受けるのだという。ピートが心配したのは、精密検査の予定日がもう少し先のはずだったからだ。彼が機上で気を揉んでいたのは妻のことだった。

その間、残りの乗員たちも飛行機を降り、スタンとマイクは混雑している空港ロビーを通り抜けようとしていた。突如として、スーザン・マッケンジーの美しい姿がスタンの目にとまった。スタンの表情で、スーザンが彼と特別な間柄にある女性だということはすぐにそれとわかった。スーザンはスタンを見て嬉しそうに驚きの声をあげた。スタンはスーザンをコーヒーに誘った。当然のなりゆきとして、ふたりの会話は過去の恋愛時代のことにさかのぼった。彼らは数年前に別れたのだった。それというのもスタンが仕事にばかり打ちこんでいたからだった。しかし、ふたりの愛情の絆はいまなお強く結ばれていた。スーザンはいちどはためらったが、スタンの熱心な説得に応じて、彼が乗る翌朝の便まで出発を延期した。

翌朝は悪天候で大雪の警戒予報がでていた。しかし、トランスコン 602 便は予定を変更せずに飛び立った。最初の着陸地点はソルトレーク・シティだったが、天候が急速に悪化していた。いちどは引き返そうとはしたものの、ピートは乗客を乗せる時間だけソルトレーク・シティにとどまることにした。

乗客が乗りこむと飛行機はすぐに離陸し、シカゴに向かった。飛行機が安全な飛行高度に達すると、ピートは操縦席を離れコックピットから出て客室を見まわった。通路を歩きながら、彼は何人かの乗客と目で挨拶を交わした。そのなかにはスーザンもいた。また、酔っばらってスチュワーデスたちに世話を焼かしている医者ジョセフ・マンハイム博士がいた。看護婦のスーザンはマンハイムのことを知っていた。博士は患者の治療に失敗したということで非難されていた。だが事実は失敗ではなかった。スーザンには博士が泥酔する気持がよくわかった。アルコールは彼の人生にきざまれた深い傷を癒やすのだった。

連邦警察官リースと兇悪犯グレコも乗り合わせていた。リースは発病していた。それもかなり重態だった。ピートが洗面所に行くために通りすぎたとき、リースはなんとか彼の注意をひこうとしたが果たせなかった。リースはもうこれ以上グレコを監視しつづけることはできないと考え、少しでも彼から離れようとしていた。ところが不幸にも、老人のリースが息もたええなことにグレコが気づき、拳銃を奪おうと襲いかかった。格闘しているうちに、弾丸が2発、発射された。1発目はスーザンの右肩を背後からブチ抜いた。2発目は壁に当たってはね返りスチュワーデスの額にかすり傷を負わせた。

銃声をきいてピートが洗面所のドアをあけた。それを見たグレコが彼をめがけて拳銃を打ちまくった。だがリースが最後の力をふりしぼってグレコに体当たりしたため、弾はあちこちに飛び散った。そのうちの1発が当たって水圧装置が炸裂した。上のコックピットでは、飛行機がとつぜん圧力を失ったことにスタンが気づき、あわてて操縦を手動に切り換えた。手動だと操作するたびに80ポンドの重圧がかかるので、彼は懸命に操縦桿にかじりついていた。

マイクはコックピットを出てピートを探しに行き。後部座席に向かって通路を歩いて行く

と、スチュワーデスが倒れているのがまず目にはいった。膝まづいて彼女を助け起こそうとすると、こんどはスーザンが座席でのけぞっているのが見えた。マイクはグレコから目を離さず慎重にピートのほうに向かった。グレコは興奮して荒れ狂っており、おびえて泣きわめく赤ん坊の金切り声がさらに彼の激しい怒りをあおりたてた。グレコが赤ん坊の母親に銃口を向けたすきを見てピートが飛びかかった。グレコはあわててピートを射った。ピートは太ももに重傷を負いながらも、拳銃をもっているグレコの腕をおさえ、床にひき倒した。すぐにマイクがピートを助けに飛んできてグレコをブチのめした。グレコは座席に手錠ががっちりつながれた。そして乗客のひとりであるベルセンという名の陸軍将校が拳銃を受けとって監視に当たることになった。

スーザンの傷は深く、ピートの脚はこなごなに砕けていた。乗客全員に対して医者の緊急呼び出しが告げられたが、マンハイム博士は口を閉ざしたままであった。スチュワーデスがピートの脚の看護にきたので、マイクはスーザンのほうに向かった。その途中でマンハイムの医療バッグが目についた。医者を見つけて喜んだのも束の間、マンハイムが「わたしにはケガ人を救うことができない」とすすり泣くので、マイクは怒るのだった。だが、みんながスーザンの



出血をとめようとしてもとまらないのを見て、ようやくマンハイムは自分が救うほか道がないことを悟った。それによってマンハイムに対するマイクの態度も変わった。スーザンは瀕死の重傷を負っていたが、マイクはマンハイムにまず機長のピートから手当てをする義務があると告げるのだった。

マイクはコックピットに戻って、スタンに事件のあらましを伝えた。スーザンがケガをしたときいて、スタンの顔色が青ざめた。彼はいちどスーザンを失ったが、もう二度と彼女を失いたくなくかった。マイクはスタンの苦しみを見抜いていたが、副操縦士としてのスタンに、自分たちの責任は飛行機をぶじに着陸させることにあるのだと念を押すのだった。とりあえず最初にやることは、地上の全管制塔に彼らの危急を告げる遭難信号「メイデイ」を発信することだった。

ピートにはもう自分が飛行機を操縦できないことがわかっていたが、同僚に助言することはできず、自分をコックピットに連れ戻してくれるよう頼んだ。マンハイムがうなずいて彼を運んだ。そしてスタンとマイクにふたりの傷が生命にかかわる重大なものであることをそっと耳打ちした。スタンは本能的にスーザンのもとに駆けつけようとした。ふたたびマイクがそれをとめた。ピートは乗客の安全を守る責任をスタンに託して彼を励ました。

トランスコン602便はシカゴ空港に近づいた。マイクとスタンは必死になって機体に着陸態勢を取らせようとしていた。すべて手動に頼らねばならないのだ。ふたりの心は焦り、からだは疲れ切っていたが、行動はじつに適確だった。客室では、スチュワーデスたちが機体破損覚悟の冒険着陸にそなえて乗客に注意を与えていた。マンハイム博士はスーザンの治療を続けていた。ベルセンは機体が地上に衝突したとき自分で身が守れるようにグレコの手を少しゆるめてやった。しかし用心深く彼を監視していた。

滑走路が見えてきた。救急車がずらりと並んでいた。機体が滑走路に入り滑降し始めた。スタンとマイクが満身の力をふりしぼって機体を降下させ滑走路にのせたのだった。ようやく機体がとまると、火災を防ぐためにすべての電源が切れ、乗客はそのまま席で待機するように命じられた。

スタンは極度に疲労していたが、スーザンのことは忘れなかった。彼は立ちあがると客室に向かった。ちょうどそのころ、救急車のけたたましいサイレンの響きが近づいてくるのを耳にして、グレコが最後の脱走をたくらんでいた。彼はベルセンの顔を張り飛ばし、通路に落ちている拳銃をつかもうとした。通りかかったスタンがグレコの手もとにある拳銃を蹴飛ばし、彼を床に叩きつけた。グレコは起きあがってさらに抵抗する構えをみせた。だが、彼の眉間にはベルセンが手にしたマグナム357型拳銃が突きつけられていた。スタンはスーザンのところにいき、彼女の頬にそっと両手を当てるのだった。

救急車が到着した。ピートはスタンとマイクに近づき、ふたりが無事に飛行機を着陸させたことに対する祝いの言葉をかけ、さらに機長の自分にかかわって聴問会に出るようせきたてた。しかしスタンは、まもなく自分がやることになっている操縦技術のすべてをつぎこんだまでのことだときっぱりと言い、スーザンに付き添って救急車に乗りこみ病院に向かった。マイクは聴問会に出ることをみずから買って出て航空事務室のほうに歩いて行った。

病院では、ピートが妻と連絡を取っていた。そして彼女の腫瘍が悪性でないことを知って安心するのだった。彼女のほうも602便遭難事故の知らせを聞いて心配していたが、ピートの傷もじきに治るとのことなので喜んでいて。

マンハイム博士はスタンに、スーザンは無事に難局を切り抜けて完全に回復するだろうと告げた。スタンは博士にたいへん感謝したが、自分を立ち直らせて職業上の名誉を取り戻してくれたと礼を言うのは博士のほうだった。スーザンの病室で、スタンは彼女が彼を必要とするかぎりずっと傍についていると誠意を伝えた。するとスーザンがこれからはずっとスタンが必要だと答えるのだった。

一方、空港では、マイクが聴問会を終えるのを待っている女性がいた。スチュワーデス主任のテリー・ダンロップだった。彼女はマイクにこれまで彼の能力を疑っていたと告白し、素直に詫げるのだった。そして乗客の生命を救ってくれたことに対して心から感謝して言った。テリーが自分を見直してくれたこと、そしてなによりも彼女が自分に愛情を待っていてくれたのだということを知って、マイクはじゅうぶんにしあわせだった。ふたりは肩を組みながら空港をあとにした。地獄に飛ぶフライトもこれで終わったのだ……